



# 将王

---

---

kanatanisorano

---

## 将王 初手「希望」

---

いったい、いままでの自分の人生は何だったのだろうか？自宅ベッドにねころがりつつ、ふと小倉は思ったのだ。これまでの40年近い人生のほとんどを将棋に費やしてきた。

幼稚園の頃だった。大人たちの縁台将棋を見よう見まねで覚え、その大人たちを負かすようになるまで時間はかからなかった。自宅近くの将棋道場へ通い、自信過多の大人たちを次々に負かし、そして驚かせた。「坊や、ほんとに強い。ひょっとしてプロになれるんじゃないか」。そうした言葉たちは小倉少年の自尊心をくすぐった。

勉強ができる訳でもない。運動もどちらかといえば苦手だ。顔もイケメンでなく、女子にもてないのも、子供ながらに漠然と納得していた。将棋はこれといって取り柄のない小倉少年の希望そのものだった。

## 将王 2手目「先生」

---

「この道場に天才少年がいる」。噂は広まり、プロ棋士の間にもまで届き始めた。

ある日、小倉が将棋道場を訪れると、見慣れない小太りのメガネをかけたおじさんが、見慣れたおじさんたち数人を相手にいくつかの将棋盤を世話しなく行き来していた。皆、がその小太りの中年男を「先生」と呼んでいた。しばらくして少年の存在に気づき、小太りの「先生」が歩み寄る。

「君か。いま何年生？」

「4年生です」

小倉は「先生」と将棋を指した。彼自身、初めてというくらいの惨敗だった。悔しさと驚きで混乱している少年に小太りの先生は言った。彼にとっては意外な言葉だった。「君はスジが良い。必ず強くなる」と。

## 将王 3手目「感謝」

---

かくして、小太りめがねの先生こと伊田六段に弟子入りした小倉は、プロ養成機関である育成倶楽部に入会。わずか3年、中学2年で最終リーグに駆け上がる。そしてさらに半年後、14勝2敗で並んだ25歳の元天才少年との相星決戦を制し、わずか14歳でプロ棋士となった。この時、すでに師匠である伊田六段は小倉に歯が立たない状態だった。

あどけない中学生棋士に取材が殺到する。小倉は注目されること自体悪い気分ではなかったが、緊張しやすい性格も手伝ってインタビューでは頭が真っ白になり、口をつぐむ事もしばしばだった。

それでもプロとしての実感は彼が通う中学校でも感じる事ができた。自分よりはるかに頭の良い生徒、運動のできる生徒、女子に持てる生徒。劣等感を抱く対象だったはずの連中が小さく思えた。小倉は将棋との出会いに感謝すると同時に、将棋に出会えなかった自分を想像すると、背筋の凍る思いだった。

## 将王 4手目「恋心」

---

出席日数に縛られない単位制の高校に進学した小倉はますます将棋に没頭していった。伸び盛りの勢いも手伝って、快進撃を続けた。

通学用のバスを降り、校舎の敷地内に入ると、後ろから「小倉君」と明るい声が聞こえた。彼がひそかに恋心を抱く女子生徒だった。

「凄いね。私はぜんぜん、将棋のことは分からないんだけど」

「いや別に、そんなに凄いわけじゃ・・・」

小倉は頬を赤らめ、言葉を詰まらせた。その間、女子生徒は何かを発見したようで目を輝かせた。「じゃあ、がんばってね。応援してるから」との言葉を残し、足早に立ち去った。

駆けていった場所は、背が高く、よく日焼けした男子生徒の隣だった。何を話しているのかは聞こえない。しかし、彼女の楽しげな横顔は確認できた。小倉は男子生徒を遠巻きに睨み付けるぐらいしか術がなかった。

## 将王 5手目「初挑戦」

---

小倉が初めて将王への挑戦権を手にしたのはプロ入りから5年、19歳の時だった。相手は川野将王である。

川野は25歳。色白で端正な顔立ちをしている。小倉同様、10代から天才棋士と言われ続け、昨年、初めて将棋界最高峰である将王の座を手にした。今回は初防衛戦となる。

下馬評は川野優位が大勢だった。いかに小倉が強いとはいえ、まだ19歳。他のタイトル経験もない。それに対し、川野は将王位に就いたのを皮切りに、5大タイトルのうちの3つまでを保持していたのだから、無理もなかった。

この大方の予測に小倉は苛立っていた。育成倶楽部時代の一時期は、川野に憧れの気持ちを抱いたこともあった。しかし、川野との初対決こそ敗れたものの、2度目の挑戦で彼を倒した時、小倉は川野も大したはないと思い始め、憧れの気持ちは次第に失せていった。

川野将王对小倉六段の7番勝負は、2勝2敗のタイで迎えた第5局を小倉が制し、王手をかけたものの、初挑戦ということもあってか、6局目以降は小倉のミスが目立ち、結局、4勝3敗で川野が辛くも初防衛に成功した。

## 将王 6手目「新将王」

---

2年後、21歳になった小倉は再び将王への挑戦権を掴んだ。時の将王は中多である。中多は前年、川野を下し将王に復位した。将王在位は通算9期となり前人未到の通算十期に王手をかけていた。

戦前の予想は割れていた。若さの小倉か、それとも実績、経験の中多か。すでに40才を過ぎた中多に衰えを指摘する声もあった。

悲願の十期達成か、初の将王位で世代交代か。注目の中で始まった将王戦7番勝負は第一局を小倉、第二局を中多が取り返し、1勝1敗で迎えた第三局。互いに一步も譲らぬ熱戦となった。形成不明のまま終盤までもつれ込んだが、最後は小倉が超手数詰みを読みきり、勝利した。

この勝負で小倉が勢いに乗ったのか、中多が落胆したのか、四局、五局は小倉が力で中多をねじ伏せ、4勝1敗で初の将王の座に就いた。

「嬉しいです。将王になるのが子供の頃からの夢でしたから。地位に恥じないような将棋を指していきたいです」。

局後のインタビューで小倉は笑顔を交え、そう話した。

## 将王 7手目「大棋士」

---

これまで長らく将棋界牽引してきた中多を破り、21歳という史上2位の年少記録で将王の座を手にしたことから、いよいよ小倉時代が始まったという空気感が急速に広まった。比較的年齢の近いところでは6歳上に川野がいるくらいで、同世代には太刀打ちできる存在は確認できなかった。

小倉は翌年の将王戦、今度は挑戦者として登場した中多を4勝2敗で返り討ちにし、さらに次の年は川野の挑戦を4勝0敗のストレートで片付け3連覇を果たした。23歳の若さにして小倉には大棋士の風格すら漂い始めていた。

その間、ちょっとした事件が起きた。問題視されたのは最古のタイトル戦である金将戦の挑戦者を輩出するトップリーグでの小倉と川野との対局だ。

先に会場に現れたのは小倉だった。まだ棋士たちの姿はなく、和室には4台の将棋盤が並んでいた。この日はトップリーグ8名の一斉対局だった。小倉は自分の席を確認し、座って川野の入室を待った。

棋士たちが次々と入室し、ゆっくりと腰を落としていく。川野を残した7人が揃った。会場がわずかだがいつもよりざわついている様に小倉は感じた。「川野さんが姿を見せないからか」。

小倉が腕時計に目を落とした。対局開始時間は午前10時。あと2分だ。その時、戸が引かれた音とともに、和服姿の川野が姿を見せた。

## 将王 8手目「上座」

---

小倉は安堵した。川野が定刻前に間に合ったことで、この得体の知れないざわつきは収まるだろうと予測していた。

そしてそれは止まった。しかし、今度は張り詰めた空気が占拠した。小倉が周りを見渡すと、視線は川野に集中している。皆の顔がやや引きつっているようにも見えた。川野が将棋盤を挟んで小倉と相対した。川野は普段どおり穏やかな表情をしていた。それでも周囲の緊張した面持ちはまだ解けていなかったが、午前10時を過ぎるといつもと変わらぬ対局風景に戻った。

対局は陽の傾きに合わせるように、4局それぞれに優劣が決していき、小倉・川野戦も小倉が優勢を維持したまま終盤を迎え、最後は川野が「負けました」と丁寧に頭を下げた。

しばらく感想戦の後、川野は立ち去った。

川野と入れ替わるようにベテランの記者が小倉に近づいてくる。そして話しかけた。

「お疲れ様でした。おめでとうございます」

「ありがとうございます」

「話は変わるけど、座る場所は上座でよかったの？」

「えっ？、上座？」

川野は同僚の先輩棋士に何か聞かれている。その棋士は小倉をちらちらと見ながら川野に話している。

「なるほど」

小倉はようやく理解した。この金将戦は序列に重きを置く棋戦である。前年度の金将戦の結果から川野が序列2位、小倉が序列6位となっていた。だから「川野が上座ではないのか？」という他の棋士たちの思いが、あのざわつきとなって現れていたのだ。

## 将王 9手目「軽蔑」

---

それでも、小倉は自分が上座に着いたことは正しいと思っていた。対戦相手だった川野も「もし僕が先に来ても下座を選択していた。小倉さんは間違っていないのでは」とコメントしている。

しかし、新聞や雑誌の論調は小倉に厳しいものだった。それらを要約すれば「確かに小倉は強いが、もっと礼儀や伝統を重んじるべき」という事らしい。

将王の地位に君臨する棋士が、将棋界の第一人者という考えに異論を挟む者はほとんどいない。しかし、60歳を過ぎたベテラン棋士や将棋関係者の一部には、将王と金将を同等の地位とみなす考えが根強くあるのも事実だった。

小倉はそうしたベテラン棋士を軽蔑していた。彼らは「遊びも含めた人生経験が盤上に滲み出る」という考えを持っているものが多かった。小倉は口にこそ出さないものの、「くだらない考え」と決め付けていた。

どう遊ぼうが、どう生きようが、そんなものは関係ない。答えはもっと単純で、高い才能を持ち、それに加えてたゆまぬ努力をした者が勝つのが当然と小倉は考えていた。

ベテラン棋士の古典的な思考を変える為には、さしたる趣味も遊びもしない自分が、勝ち続けることしかないと思っただ。

決意通りに小倉は勝ち続けた。20代で将王7期という揺るがぬ実績を作り上げ、「将棋といえば小倉」とさして将棋に詳しくない人々にまで漠然と知られるまでに至った。

その間に小倉は何度か女性と恋愛関係も築いた。中でも20代の終わりから30歳をまたいだ3年ほど続いた、女流棋士の高林梨奈との交際では結婚も真剣に考えた。しかし、その直前、彼女は消えた。

よりによって同業者である棋士の元へ走ったのだ。名は岸谷というその男が、自分より魅力的ならば、まだ分からないでもない。しかし、年齢的には小倉と同世代ながら、まだ五段で、勝ったり負けたり平凡な戦績。人気がある訳でも個性が強い訳でもない。副業に精を出すタイプでもなく、年収は小倉の十分の一にも満たないだろう。外見も凡庸な岸谷のどこに自分との交際を破壊するような魅力があったのか、小倉は梨奈に聞いてみたくもあり、またその答えを恐れてもいた。

## 将王 11手目「悪役」

---

結婚まで考えた高林梨奈と別れて以降、小倉はこれまでもまして、将棋に没頭するようになった。30代に入り、将王戦8連覇。20代の7期と合わせて15期となり、断トツの歴代1位である。

8連覇目の相手は意外だった。39歳の小倉もベテランの域に差し掛かったが、挑戦者は還暦を越えていた。遠山九段。わがままな男だった。しかし、その豪放磊落な棋士は世代を問わず、将棋ファンから愛されていた。

小倉にしてみれば少年時代から骨太の体格、分厚い手、顎鬚まで蓄えた遠山は強面の中年男だった。しかし、初めて指した時は畏怖の念すら抱いた小倉も、次第に遠山の自分本位の態度に腹立たしさを覚えていく。ある対局では「場所が狭い」と呟きながら、将棋版をその太い両腕で押して、自らの縄張りを広げたり、負ければすぐ立ち去り、勝てば上機嫌で何時までも感想戦に付き合わされるのである。

しかし、小倉は遠山を心底嫌ってはいなかった。対戦成績で大きく彼を引き離している優越感もある。また、遠山の将棋への情熱が、時を経ても衰えないことには一定の評価はしていた。

将王の記録に関しては歴代の大棋士たちを凌駕してきた小倉もひとつだけ破れなかったものがある。それが遠山の20歳での将王位獲得という最年少記録だ。彼こそ元祖天才なのである。しかし、その後は周囲の期待ほどの実績は重ねられず今日に至った。

もはや過去の人と位置づけされていた遠山の将王挑戦に棋界は久しぶりに盛り上がりを取り戻した。周囲が遠山の23年ぶりの将王返り咲きを期待すればするほど、小倉はヒール役を演じざるを得なかった。

「必ず4戦で終わらす」。小倉は固く決意していた。

## 将王 12手目「動揺」

---

小倉対遠山の将王戦七番勝負は戦前の予想通り、小倉の決意通りに進行していった。3局を終えて小倉の3連勝。これといった危うい場面もなく、将王防衛に王手をかけた。

しかし、第4局。小倉は中盤まで戦いを優位に進めながら、遠山の粘り腰に攻めあぐね、ついには逆転を許し、敗れた。遠山は1勝3敗という、王手をかけられた状況に変わりのない事を忘れたかのように上機嫌だった。小倉は落胆していた。防衛することは疑いの余地はない。この白髪が目立つ老棋士に対し、4連勝で決められなかった自分の不甲斐なさに腹を立てた。

マスコミ、将棋ファンはあたかも遠山が将王のタイトルを奪還したかのような騒ぎようだった。その状況を眺めながら、小倉は第5局は勝つのは当然として、遠山本人は勿論、夢を見ている者たちをを奈落の底に突き落とすような内容で、現実に戻す事にこだわった。

しかし、いざ第5局が始まると勢いに乗った遠山が猛攻を仕掛け、小倉は防戦一方となった。対局前からすでに平常心を失っていた小倉は、遠山の迫力にさらに動揺し、そして崩壊した。結果は小倉の完敗だった。

局後の感想戦。顔を紅潮させ、饒舌に話しながら会心の一局を振り返る遠山に、小倉は我慢できず「少し体調が悪いのでこれで失礼します」と小さな声を発し、その場を立ち去った。

## 将王 13手目「静寂」

---

第6局。すでに遠山が将王を8割方、手にしたような周囲の喧騒の中で、小倉は必死に平常心を取り戻そうとした。

「実際に3勝2敗で王手をかけているのは自分で、遠山は普通に指せば負ける相手ではない」と言い聞かせる。それでも押し寄せてくる重圧に押しつぶされそうになる。

対局が始まって、まだ小倉の内なる闘いは続いていた。一手一手に時間を費やし、かみ締めるように指していく。対する遠山は早めの着手が続き、戦況もまた第5局と同じく、遠山が攻め、小倉が受ける展開になった。

膠着状態がしばらく続いた。1日目が終わりに、2日目の昼前になっても手数は進んでも、遠山に決定打はなく、小倉も反撃には至らなかった。

小倉は決意を固めていた。「その場、その場の最善手を指す」と。あえて視野を狭くし、盤面のみに集中した。その執念に気押されたのか、小倉の粘りに嫌気が差したのか、遠山が悪手を指した。その隙を見逃さず、小倉の反抗が始まった。

小倉が攻め出してからは早かった。午後4時12分、遠山投了。将棋界に静寂が戻った。勝った小倉にも笑顔がなかった。ストレートで勝つと決めていた相手に二度も負けた。それに自分が勝っても、周囲は喜ばない。それどころか、皆が一斉にうつ状態に陥ってしまったのではないかとさえ感じさせ、自分の存在意義をすぐには見出せなかった。

しばらく日も経ち、小倉も冷静さを取り戻していた。自分の存在意義。それは強さ。将棋が誰よりも強いことだ。しかし、それを根底から脅かすものが数年前から世間を、将棋界を賑わしている。

コンピュータである。人工知能といってもいい。その名はヘボン。確かに若手の台頭も全く気にならないといったら嘘になるが、小倉はまだまだ負ける気がしなかった。しかしながらヘボン。彼に勝てるかは自信がなかった。いや、ここ2年ほどは勝てるイメージすら持てなくなっていた。

10年ほど前から、コンピュータ将棋とプロ棋士との戦いは始まった。最初の頃は女流棋士でも勝っていたのだが、次第に歯が立たなくなり、プロの卵である育成クラブの精鋭、若手棋士、段位の高いベテラン棋士をも撃破していく。

そして、ここ3、4年は現役のタイトルホルダーを破るなど「コンピュータソフトはプロ棋士より強い」という説が、にわか説に説得力を持ってきたのだ。そしてコンピュータソフトの中でも最強と名高いのがヘボンである。

勿論、小倉は指していない。「もし負けたらどうする」。これが小倉の偽らざる心中であり、プロ棋士の間でも、その思いは共有されていた。しかし、もはや世間の注目は小倉対ヘボンに集約されつつあった。小倉は背中に刃を突きつけられた思いだった。

「自分は絶対にコンピュータソフトとは指さない」。小倉の決意は年を追うごとに固まっていた。しかし、そうした態度にファンや関係者から不満の声が上がりだし、当初は「小倉はヘボンと指すべきではない」と考えていた棋士たちも徐々に「もはや指さざるを得ないのでは」との見方が強まっていた。

小倉は会長室のドアをノックした。

「どうぞ」

聞き覚えのある声がした。川野は45歳の若さで将棋連盟の会長という重責を担っていた。棋士としてもトップクラスの力を維持し、現役バリバリなのだが、人格者として名高い川野に白羽の矢が立った。棋士を含めた周囲の「川野さんしかいない」という声に抗しきれなかったのだ。

「お話とは何でしょうか？」小倉が黒皮のソファに腰を落とした。テーブルを挟んで、対局するような目で川野の端正な顔を見た。

「小倉さんには申し訳ないが、ヘボンとの対局を引き受けて欲しい。勿論、無理にとは言いません」。いつもと変わらず、川野は穏やかな口調だ。

「嫌です。受け入れられません」。小倉の言葉からは強い意志が滲んでいた。

「実は開発サイドから、ぜひとも小倉さんと対戦したいと持ちかけられているんです」

「そうですか。うん、そうですね。どうしてもと言うなら、引き受けてもいいですよ」

「本当ですか？」。川野の声が少しだけ弾んだ。

「しかし、条件があります。今後1年の対局を休ませてください」。小倉は静かな口調で言った。

「それはできません。小倉さんは将棋界の顔です」

「ならば、やはり受けられません」

「分かりました。開発側には私から伝えておきます」。川野の口調には、冷静ながらも決意を固めたような芯の強さがあった。

## 将王 17手目「敗北」

---

川野とヘボンが将棋盤をはさんで向き合っている。

「私が相手をしまししょう。もしコンピュータに私が負ければ、もはや、そちらが棋士より強いと公言していただいて結構です」

川野は人工棋士研究チームにそう伝えた。

川野はしばらく瞑想した後、白く長い指で歩をはさみ角道をあけた。棋士たちには彼の覚悟が痛いほど伝わってきた。小倉の変わりに自らがいけにえになる覚悟が。

川野・ヘボン戦は川野やや優位のまま、終盤戦に突入した。川野がプロ棋士に終盤までリードして逆転されることはまずない。それほど、終盤の強さには定評があった。しかし、それは人間相手のことであり、コンピュータ相手にも当てはまるかは分からない。棋士、将棋ファンは固唾を呑んで見守るしかなかった。

次第に川野の端正な顔に変化が見られた。頬を膨らませてみたり、目を閉じたままクビを後ろに倒してみたり、あがいている様にも見えた。

「どうやらヘボンが逆転したようです」。若手棋士が今にも消え入りそうな声で言った。

ひとたびコンピュータソフトにリードを許すと、そこから抜き返すのは至難だ。次第に形成ははっきりしていく。将棋の宇宙が狭まれば狭まるほど、ヘボンの正確な差し手が際立つ。

川野がコップに口をつけた。しばらく将棋盤を見つめ「どうも負けました」と丁寧に頭を下げた。

翌日の新聞には「コンピュータソフトが棋士を超えた」という記事が大きく掲載されていた。

### 対局者のコメント

川野九段（将棋連盟会長） 終盤の入り口あたりまでは悪くないと思っていましたが、そこから決め手が見出せなかった。力負けです。残念ですが、コンピュータは棋士を超えたのかもしれませんが。この勝負をもって棋士対へボンの対局は一区切りとさせていただきます。

土井コンピュータソフト・へボン開発代表 勝たせていただきました。勝負を受けてくれた川野さんに大変感謝しています。小倉さんと勝負できなかったのは心残りですが、コンピュータソフトが棋士を超えたことは証明されたと思います。これからも将棋のレベル向上に協力は惜しみません。

小倉は土井というへボンの隣で、代理として駒を動かしていた男のコメントを何度も読み返した。正直、安堵していた。勿論、悔しさはある。しかし、自分が川野ほど器の大きな人間でない事も知っていた。もしへボンと対戦して負けた時のリスクを想像すると空恐ろしかった。黙ってやり過ごす以外に手が見当たらなかった。

川野がコンピュータソフト「ヘボン」に敗れて一ヶ月。表面上、将棋界に特に目立った変化は見当たらない。小倉は棋士仲間から、漠然と冷たい視線を浴びているような気分にもなったが、気にも留めなかった。しかし、夜になると心の奥底が騒がしくて、ここ一週間ろくに眠れず、軽い睡眠導入剤を使用していた。

自分の価値とは何だろう。それは強さだ。そこまではいとも簡単に答えは出る。しかし、もしヘボンに負けたとして何が残るのか？川野には美しさが残る。遠山には個性が残る。しかし自分には何が残るのか？何も残らないのではないか？もしかしたらかつての恋人、高林梨奈もそこに気づいていたのではないのか？

鏡の前に写る将王の顔は、いまにも中年に飛び込みそうな、少しくたびれた顔をしていた。梨奈と別れてからは恋愛や結婚願望も急激に薄れてしまった。将棋がなければ何も持たない独身の40手前の男。そんな事を考えていると、ますます目が冴えてしまい、さして強くもないアルコールに手をつける。睡眠薬とアルコールが良くない組み合わせとは分かっている。しかし、もはや自分にやるべき事は残されていないのではないか？そう思うと、二度と目覚めることがなくても、悪くないのではないかと小倉は思うのだ。

明るく朝、といっても午前11時を過ぎていた。自室ベッドの上の小倉は、朦朧とした状態で携帯電話を手にした。

「ヘボンと対戦させてもらえませんか？」

受話器の向こうで川野の驚きと戸惑いを感じられた。いま、この朦朧とした時を逃せば、またヘボンに負ける恐怖が自分を支配してしまう。だから先手を打ったのだ。

「いいんですか？」。川野は小倉を気遣うように言った。

「はい。まだ間に合うのであればですが」

「ソフトの開発側は喜ぶと思いますよ。小倉さんと対戦するのが念願だった訳ですから」

「ええ、まあ」

「小倉さん」

「はい」

「この対局の勝ち負けによって、あなたの価値が変わることはないですよ」。川野は小倉の気持ちを見透かしたように言った。

「そうですかねえ」

「ええ、全く変わりません」

本当はその理由を聞きたかった。しかし、あえて小倉はそれを尋ねることなく、電話を切った。

## 将王 21手目「実現」

---

コンピュータソフト・ヘボンの開発グループの中心人物である土井は、突然、降って沸いた話に驚き、そして瞬時に喜びに変わった。彼は「どれだけ時間をかけて研究してもらってもかまいません。半年でも1年でも」と弾んだ声で川野に伝えた。しかし小倉の答えは意外なものだった。「できるだけ早く対戦したいです」。

かくして川野・ヘボン戦からわずか一ヶ月足らずで小倉将王対ヘボン戦は実現した。将棋盤を挟んで小倉とヘボンはついに向かい合った。ヘボンの代理人の土井が素人の手つきで駒を動かすと、一斉にフラッシュがたかれ、その2分後、小倉が駒を指に挟み、それをこすり付けるように盤上に落とすと、さらに眩しく無数の光が飛び交った。

## 将王 22手目「勝算」

---

「勝つ。勝ちたい。いや、それよりも負けたくない」。小倉の偽らざる気持ちだった。そしてかなり弱々しい決意だった。

かつてこれほど勝算のない対局があっただろうか？いやプロに入ってから、これほど分の悪い戦いはなかった。プロになりたての頃、当時の将王との対局の時も、結果はともあれ、気持ち的には五分五分のつもりだった。この戦いに勝てる確率は2割。ここ数年、小倉なりにヘボンについて研究はしていた。圧倒的に強い。かつては隙のあった序盤も、ほとんど見当たらなくなった。偽らざる小倉のヘボンに対する評価だった。

「奇策でいこうか？」。小倉は今朝の朝食の時まで迷っていた。しかし、対局室に入り、いまや宿敵となったヘボン、そして隣に座る土井、そしてその手前に置かれている将棋盤を見た時、心の揺れは止まった。そして決意を固めた。

「自分は将王である。弱者の戦術は採れない」

戦いはこれまでに何度も見られた定跡の手順で淡々と進んだ。

昼食休憩を挟み、午後1時に再開されてから、さらにしばらくの時間がたった。6時間あったはずの小倉の持ち時間も、すでに2時間を切った。勝負はすでに中盤、いや終盤の入り口といった方が的確かもしれない。この時点でもプロ棋士たちが形勢判断に困るほど、優劣をつけるには難しい戦況だった。

小倉の額からは汗が滲んでいる。ハンカチで汗を拭いながら、盤面を食い入るように見る彼の姿は「ロボット」「冷徹」という彼のイメージからは程遠かった。まるで時限爆弾を処理しているような緊迫感で、彼は駒を移動させる。時に10分、時に30分という時間を費やししながら、少し震えた指で駒を挟むのだ。

小倉は少し意識が遠のくような、盤面に吸い込まれるような感覚の中で、感じていた。ヘボンの指し手は、決して冷たくない。むしろ温かみのある人間味のある手を指してくる。どこか懐かしい手。それもそのはずで、ヘボンのデータには小倉は勿論、川野、遠山、中多らあまたの棋士たちの努力の結晶が詰まっているのだ。

## 将王 24手目「覚悟」

---

小倉はいわば将棋界の長い長い歴史と戦っている。「通りで強いわけだ」と心の中で苦笑いを浮かべてみる。

「小倉先生、残り1時間です」

記録係の戸前三段の声が小倉の耳に届き、視線を声の主に向ける。若者は気押されたように俯いた。

あと1時間。小倉の形勢判断では少し苦しいが、まだはっきり悪い訳ではなかった。しかし、このままの状態を使いきり、秒読みにでもなれば、勝ち目のない事は分かりきっていた。残り時間のあるうちに、勝負を決したい。小倉は直感を頼らざるを得ないと覚悟した。

勝負は形勢不明のまま、最終盤に突入していた。へボンの攻め手を受けることをせず、小倉もへボンの玉に迫る手を選択したのだ。激しく攻め合う両者。へボンの隣で駒を動かす土井も切迫した局面を肌で感じたのだろうか、心なしか青ざめていた。

小倉はジレンマに陥っていた。もう少し時間を使って考えたい。しかし、すでに残り時間は30分を切っている。やはり直感に頼らざるを得ない状況だった。

数手、攻めの応酬が続いたが、先に受けたのはへボンの方だった。別室で観戦しながら、形勢判断を試みていた多くの棋士たちから、どよめきが起こった。川野は表情を変えず、静かに見守っている。

なおも攻める小倉。固く結ばれていたはずの土井の口が、少しずつ開いていく。攻めがつながるのか、切れるのか小倉自身にも分からなかった。

## 将王 最終手「郷愁」

---

「小倉先生、残り10分です」。記録係の戸前の声。小倉の耳にも届いているはずだが、その若々しい声に何の反応も示さず、視線を盤上から動かさない。

「寄りそうもない。ここまでなのか」。小倉にはヘボンが笑ったように見えた。土井の顔は見たくない。小倉は静かに目を伏せた。脳内でオクラホマミキサーが流れ出した。

小学校の校庭、初恋の女の子の姿が浮かぶ。それに続き、さして仲がいい訳でもなかったクラスメートとのたわいもない話、将棋道場に現れた小太りのおじさん。学生服姿で対局するプロになりたての自分。中多を破り、初めて将王のタイトルを手にした時の喜びの感情。そしてかつての恋人、高林梨奈の顔が浮かび、その後、「この対局の勝ち負けによって、あなたの価値が変わることはないですよ」と川野の声が聞こえ、オクラホマミキサーが止んだ。

「小倉先生、残り5分です」

小倉は胸の辺りが、しだいに熱くなってきたのを感じ取った。そして、それが上へと流れていく。

「あれ、どうしたんだろう?」。小倉の目から涙がこぼれ、頬を伝った。「涙って、温かいものなんだな。すっかり忘れていた」

小倉が最後の力を振り絞るように、重りをつけたような駒を指でようやく持ち上げ、升目に落とし込んだ。そこから手がパタパタと進んだのち、小倉の手が、そして少し揺れていた体がぴたりと止まった。

「どうも、負けました」。小倉は淡々とした口調で敗戦を認めた。ヘボンは相変わらず無表情で何も言わず、代わりに土井が少しかすれた声で「ありがとうございました」と頭を下げた。(完)

## 将王

<http://p.booklog.jp/book/103707>

著者 : kanatanisorano

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/barondock57/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/103707>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/103707>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ